朝　鮮　学　会

第75回大会要項

会　場：天　理　大　学

2024年10月5日(土)・6日(日)

2024 年度　第 75 回 朝鮮学会大会プログラム

１．日　時 ： 2024 年 10 月 5 日（土）・6 日（日）
２．会　場 ： 天 理 大 学
３．大会プログラム
第 1 日　10 月 5 日（土）
１）公開講演　13：00 ～ 16：30（９号棟）
　　Ⅰ . 朝鮮時代前期の仏伝図と『釈譜詳節』
　　九州大学大学院人文科学研究院 主幹教授　井 手 誠 之 輔 氏
　　Ⅱ . 石窟庵製作年代の再検討
　　韓国国立中央博物館 前館長　閔　丙　贊　氏
２）総　会：17：00 ～
３）懇親会：18：00 ～（総会終了後）　於：心光館 1F 食堂

第 2 日　10 月 6 日（日）
　研究発表会 10：00 ～　　《（講）非常勤講師 /（研）研究員 /（院）大学院生》
＊タイムテーブルは進行状況により変更になる場合がございます。

◆第 1 部門：語学分野（2 号棟 24A）
１．10:00 ～ 10:30
『日本書紀』の韓国系人名の比較研究　　高崎経済大学 (講) 梁　紅　梅
２．10:40 ～ 11:10
『韓国地名総覧』の「岩地名」に含まれる「바위系語彙」分布について　北海商科大学　水 野 俊 平
３．11:20 ～ 11:50
『續三綱行實圖』の漢字音について　　東京大学 (研) 澁　谷　秋

< 昼食：11:50 ～ 13:00>

４．13:00 ～ 13:30
物語論における語り手の視点 ―語学研究に導入するための試論―　　東京外国語大学　五 十 嵐 孔 一
５．13:40 ～ 14:10
ミラティヴィティの観点から見た朝鮮語副詞節の脱従属節化　　朝鮮大学校　金　成　樹

＜休憩：14:10 ～ 14:30 ＞

６．14:30 ～ 15:00
役割語の観点からみる韓国語研究の可能性　　札幌国際大学　趙　恵　真
７．15:10 ～ 15:40
延辺朝鮮語の 3,4 音節名詞のアクセントの変化に関する研究
―音節量・分節音との関連性を中心に―　　東京大学 (院) 國　分　翼
８．15:50 ～ 16:20
ソウル方言の閉鎖音に対する延辺朝鮮語母語話者の認知様相
―聴取実験を用いて―　　東京大学 (研) 許　秦

◆第 2 部門：文学分野（2 号棟 23A）
１．10:00 ～ 10:30
< 青邱野談 > が再現した神話的想像とその挫折の意味
―虎・熊・龍との決闘と婚姻の素材を中心に―　　韓国・聖公会大学校　洪　ナ　レ
２．10:40 ～ 11:10
金東鳴の詩と検閲　　天理大学　熊　木　勉

３．11:20 ～ 11:50
張赫宙作品に描かれた朝鮮人女性
―1930 ～ 1940 年代の朝鮮語・日本語作品を中心に―　新潟県立大学　高　橋　　梓

<昼食：11:50 ～ 13:00>

４．13:00 ～ 13:30
金南天小説における離脱の倫理　立命館大学（講）影　本　　剛

◆第３部門：歴史学・考古学・文化人類学・その他の分野（2 号棟 24B）
１．10:00 ～ 10:30
対馬藩から見た明治維新期の書契問題　舞鶴工業高等専門学校　牧 野　雅 司
２．10:40 ～ 11:10
植民地期朝鮮における朝鮮人女性医師に関する研究
―東京女子医学専門学校出身者を中心に―　大阪産業大学　崔　　誠　姫
３．11:20 ～ 11:50
京城帝国大学法文学部と高等遊民
―大学設立理念と実態の差にみる「外地」帝国大学の特徴―　武蔵高等学校中学校　通 堂 あ ゆ み

<昼食：11:50 ～ 13:00>

４．13:00 ～ 13:30
植民地期済州島の三姓始祖祭祀財団の社会的位相　一橋大学（院）金　　功　熙
５．13:40 ～ 14:10
朝鮮総督府のキリスト教系新宗教に対する政策
―宗教行政により公認されるキリスト教「異端」団体―　桃山学院大学　青 野　正 明

公開講演

朝鮮時代前期の仏伝図と『釈譜詳節』

九州大学大学院人文科学研究院 主幹教授　井手誠之輔

石窟庵製作年代の再検討

韓国国立中央博物館 前館長　閔　丙　贊

1.『日本書紀』の韓国系人名の比較研究

高崎経済大学 (講)　梁　紅　梅

本研究では『日本書紀』に現れた高句麗、百済、新羅の三か国の人名に使用された漢字表記に対して歴史的、音韻論的比較研究を行った。

古代の高句麗語、百済語、新羅語の研究において各国の人名は貴重な資料源になるが、三か国の人名に関わる研究は数少なく、その比較研究はいまだに行われていない。『日本書紀』には高句麗人名が 40 用例、百済人名が 192 用例、新羅人名が 101 用例現れ、使用された漢字は合わせて 341 個ある。三カ国の人名の比較研究はこれら三言語の比較研究にも繋がる。

人名の漢字用例から見られる高句麗語、百済語、新羅語の特徴は以下の通りである。

①音節数において、新羅の用例では初期は表音式漢字表記が使われていたものの、統一新羅時代になると人名の姓＋名 (2 文字) の形式が多い。高句麗と百済の人名の用例には 2 音節語が最も多く、5 音節語、6 音節語の用例がそれぞれ現れている。

②子音の喉頭素性において、百済語、高句麗語、新羅語では全体的に無声音が最も多く、有声音と有気音が最も少なく現れている。新羅語は古代韓国語と共通しているといえるが、新羅語において有声音と有気音が少ないのは、古代韓国語において有声音と有気音の発達が最も遅かった事情と合致している。

③子音の調音位置において、全体的に舌頂音が最も多く、両唇音が百済語では他に比べ多いが、逆に口蓋音が少なく現れている。

④語頭子音と語中子音に関しては、高句麗語と新羅語では語頭には来母 /l/ が現れていないが、百済では数回現れ、また全体的には舌頂音が語中で現れる割合が語頭より多い。

⑤母音においては、まず全体的に中国語中古音の開合度 (V 対 wV（V= 母音）) による母音の弁別性は見られない。特に舌頂音の子音が現れるときは合口は殆ど現れない。この特徴は朝鮮語漢字音と共通する。

⑥また、歌韻 1 等、魚韻 3 等、脂韻 3 等、唐韻 1 等などは 3 言語の用例で同じ割合で現れる一方、咍韻、灰韻、佳韻などは百済語にしか現れていない。百済語は支配層と非支配層の言語が異なる 2 重言語だと言われるが、真韻、欣韻、侵韻などは百済語と新羅語に共通して現れる一方、百済語と高句麗語、新羅語と高句麗語では共通する韻が数少ない。また語末子音 /m/ を持つ咸韻は新羅語と百済語に多く現れているのに対し、高句麗語では殆ど現れていない。

⑥第一音節の声調において、全体的に平声が最も多いが、新羅語では「金」(平声) 氏の姓が多く現れた影響で他よりも多数現れている。また、第一音節では上声が三言語で同じ割合で現れるが、去声が新羅語で最も少なく、入声は百済語で最も多い。百済語は CV 構造だと言われるが、入声と音節構造の関係については綿密に検討しなければならない。

2.『韓国地名総覧』の「岩地名」に含まれる「바위系語彙」分布について

北海商科大学　水　野　俊　平

本発表は『韓国地名総覧』に収録された「岩地名」に含まれる「바위系語彙」を抽出し、その分布と伝播を明らかにすることを目的とする。『韓国地名総覧』はハングル学会によって編纂され、1966年～1986年に刊行された地名事典である。この事典には61万5千にも及ぶ韓国の地名が地域別に収録されている。地名はその保守性ゆえに古語を反映した語彙や、方言を反映した語彙が含まれており、方言形の伝播の様相を把握するのに有用である。地名に含まれた方言語彙は、十分な出現数が確保されている場合、その出現数の多さから分布の有無のみならず、分布の夥多（濃淡）も把握できるという長所を持つ。

『韓国地名総覧』には岩の名称である「岩地名」が2万6千地名収録されている。そのうち、本発表の対象となる「岩地名」は2万1千地名に達する。この出現数は方言語彙の分布を把握するに十分な数だと言える。「바위系語彙」の分布は次の通りである。

①「바위」は、ソウル・京畿道を中心に分布している。その範囲はソウル・京畿全域と、忠南の北部、江原・忠北・慶北の一部に亘っている。分布の濃淡を見ると、ソウル・京畿・忠南の北部が特に濃密になっており、「바위」がソウルから周辺地域に伝播された様相を把握することができる。

②「바우」の分布は江原・忠北・忠南の南部・全北・全南・慶北・慶南と広範囲に亘っている。分布の濃淡を見ると、江原・全北・全南・慶南の南部で特に濃密になっている。分布の状況から、恐らく「바우」は「바위」の伝播以前に中央から周辺に拡散し、特に江原・忠南の南部・全北・全南の方向に改新波が向かったと思われる。慶南の南部で「바우」が濃密に分布しているが、特に釜山周辺で分布が濃密なことから、人的通行による改新波波及の可能性を考慮することができる。

③「방우」は慶北の東部・慶南の一部に分布が見られ、慶南の東部での分布が濃密である。「방우」は「바우」に「ㅇ」が添加された形であると見られる。「방우」と「바우」が同比率で出現している地域の分布、同一地名に「방우」「바우」の両方が含まれた「複数地名」の分布から見ると、「바우」に「ㅇ」が添加されたことは明らかである。

④「바구」は慶南の西部・全南の東部のみに濃密に分布しており、「바위系語彙」の中で最も古形を維持している方言形である可能性が高い。なお、慶北の一部地域に「방구」があらわれるが、これは「방우」と同じく「바구」に「ㅇ」が添加された形であると思われる。

なお、文献にあらわれた「바위系語彙」は後期中世朝鮮語から近代朝鮮語に至るまで「바회」であり、これが中央語で「바회 >* 바외 > 바위」となり、その変化の過程で周辺に伝播されたと思われる。その過程で、単母音化・母音上昇などの音韻変化を経た後、その語形が広く伝播されたと見るのが妥当であろう。

3.『續三綱行實圖』の漢字音について

東京大学（研）　澁　谷　　秋

『續三綱行實圖』は 1512 年に編纂がはじまり，1514 年に刊行された 3 巻 1 冊の木版本である。その名の通り『三綱行實圖』の続編として編まれ，『三綱行實圖』以降の孝子，忠臣，烈女の事績を収録し，庶民の教化を目的とした教化書である。

『續三綱行實圖』は 1514 年に刊行された原刊本系列の刊本と，その後 2 度に渡って重刊された重刊本系列の刊本がある。そのうち，原刊本系列の諺解文は漢字ハングル交じり文からなり，漢字音はいわゆる「東國正韻式漢字音」が用いられる。『續三綱行實圖』が 16 世紀初の刊行であるにもかかわらず東國正韻式漢字音が用いられるのは 15 世紀末に刊行された『三綱行實圖』の編纂方式に拠ったためだと考えられる。

『續三綱行實圖』にはおよそ 500 の漢字が現れる。それらは基本的に東國正韻式漢字音が付されるが，必ずしも東國正韻式漢字音と一致しない例もみられる。『續三綱行實圖』の原刊本が刊行された当時，すでに東國正韻式漢字音は用いられなくなっていたことにもよると考えられるが，錯誤にどのような傾向があるのか検討を行う。

本発表での考察に用いるテキストは『續三綱行實圖』原刊本系列刊本のうち，現在確認できる伝本のなかで最古本と考えられる大英図書館所蔵本を底本とする。ただし，忠臣図は当初 5 つの事績からなっていたが，1560 年以降一人の事績が追加される。追加される 6 話目は原刊本系列刊本のうち蔵書閣所蔵本だけが有するため，6 話目に関しては蔵書閣所蔵本のテキストを用いる。

4. 物語論における語り手の視点
―語学研究に導入するための試論―

東京外国語大学　五十嵐孔一

本稿は「語学研究におけるテクスト論―韓国語学を中心に―」(五十嵐孔一, 2024, 東京外国語大学論集, 第 108 号掲載予定) で論じた話し手と語り手の視点について，一部修正を加えて，口頭で発表するものである。

語学研究において話し手の視点は解釈のための重要な手がかりになるが，対象によってはそれだけでは十分に解釈できないこともある。テクストの定義に基づいた語学研究の図式 ([発信者―テクスト―受信者]―解釈者) を見ると，テクストを中心にして「テクストから文へ」，そして「文からテクストへ」と向かう双方向的な視座が認められる。このようにテクストの見方は１つに限らない。また，解釈者は客観的な立場からテクストを見ており，テクストは研究の客観的な根拠となる。

本稿ではこのようなテクスト論の観点から連結語尾「- 더니」と「- 었더니」の主体の制限について論じた。まず話し手の視点から検討したところ，「- 었더니」の主体が第三者のとき，十分に解釈しきれなかった。そこで本稿では，話し手の視点だけでは解釈しきれない場合，語り手の視点から解釈する可能性について論じた。語り手は文学を研究対象とする物語論で議論されるが, テクストの多様な見方の１つであり, なおかつ研究の客観的な根拠として，それを語学研究の場に持ち込んだのである。本稿ではテクスト内に語り手を含んだ図式を次のように示した。

[作者― [語り手― [話し手―テクスト―聞き手] ―聞き手 (narratee)] ―読者] ―解釈者

従来，[話し手―テクスト―聞き手] をテクスト論の基本図式としていたのに対し，本稿では，語り手の視点を含み, この [話し手―テクスト―聞き手] を物語としてとらえた。そうして, [語り手―テクスト (物語) ―聞き手 (narratee)] と示したのである。また，この語り手を含んだ図式は作者の創作した小説であるので，[作者―テクスト (小説) ―読者] と示される。このように，話し手の視点をさらに客観的な位置から眺める語り手の視点を設定したわけである。

語り手の視点から再検討したところ，語り手が三人称の視点から語っていることが明らかになった。このように，語り手の視点も語学研究において重要な手がかりとなり，今後もテクスト論から取り組む課題がなお多いことを述べた。

5. ミラティヴィティの観点から見た朝鮮語副詞節の脱従属節化

朝鮮大学校　金　成　樹

本発表では，朝鮮語副詞節の脱従属節化（主節化）におけるミラティヴィティ（意外性）の用法について論ずる．

これまでに朝鮮語におけるミラティヴ・マーカーに関しては，- 군 (- 구나), - 네 , - 다니がミラティヴィティを表す要素であるという指摘があった (DeLancey 1997 等) ほか，朝鮮語においてミラティヴィティとエヴィデンシャリティ（証拠性）を表現する文法手段について検討した박진호 (2011), ミラティヴィティの本質的特性や朝鮮語のミラティヴ・マーカーとその意味について議論した조용준 (2016)，中期朝鮮語の感動法についてミラティヴィティの観点から論じた河崎啓剛 (2016) などがあったが，副詞節の脱従属節化についてミラティヴィティの観点から考察した論考はなかったと言える. また, 朝鮮語の等位節マーカー - 고がミラティヴィティを表す機能を備えていないとした Kuteva (2017) の指摘についても再検討を要する．

本発表ではまず,「21 世紀世宗計画最終成果物」の口語・文語コーパス及び「KBS 舞台」のドラマ 25 篇分のスクリプトから収集した実際の用例に基づき，副詞節 - 고 , - 는데 , そして引用副詞節 - 다니の脱従属節化がミラティヴィティを表示するマーカーとして機能することを確認する．

次に，定形性 (finiteness) の観点から見た場合に，①朝鮮語において定形性が高く主節に近い構造を持つ副詞節が，ミラティヴィティの脱従属節化用法を獲得しやすいこと，②ミラティヴィティを表す脱従属節化用法は，テンス分化がなくなるかあるいは弱化し，聞き手めあての伝達機能も弱く独白に近いので，むしろ定形性が相対的に低いが，これは脱従属節化そのものとは無関係にミラティヴィティ自体の特性と関わる問題であることを述べる．

最後に，朝鮮語において「新情報」・「認識の改変」を表示するという点において共通する，定形節と脱従属節化の表すミラティヴ的意味の間には，一定の対立関係が認められることを指摘する．すなわち，定形節の - 군 (- 구나), - 네は改変された認識である命題内容が話し手の「発見・気づき」であることを詠嘆的に述べるが，脱従属節化の - 고 , - 는데 , - 다니は新情報である命題内容が話し手にとって意外で予想外のもの・期待に反するものであること，そしてそれによる話し手の驚きを表す．Aikhenvald (2012) の枠組みで言えば，‘new information’という点で共通する両者は，定形節のミラティヴ的意味が ‘suddenly discovery’ に偏るのに対し，脱従属節化のミラティヴ的意味が ‘surprise’ ‘unprepared mind’ ‘counterexpectation’ に偏るという点において対立していることを主張する．

6. 役割語の観点からみる韓国語研究の可能性

札幌国際大学　趙　恵　真

本発表では、新しいアプローチとして、マスメディアにおける韓国語使用の研究の可能性について検討する。特に、金水 (2023) が提唱した「役割語」の概念に焦点を当て、ドラマにおける韓国語の使用実態を分析することを目的とする。

役割語とは、特定の言葉づかいを聞くと特定の人物像が思い浮かぶことである (金水 2023：203)。趙 (2024) による韓国ドラマの台詞分析の結果、韓国語では聞き手との関係性に応じて言葉づかいが変化することが明らかになった。このため、韓国語の役割語を分析する際には、「話し手と聞き手の関係性」という視点が必要である。

従来の韓国語に関する研究では、マスメディアにおける特異な言葉づかいについての研究が不足していた。本発表では、この分野を「メディア韓国語」と名付け、役割語の範囲を超えて韓国語使用に関する研究の可能性を探る。

韓国ドラマの台詞におけるメディア韓国語の具体例について述べる。

まず、方言については、ドラマ『ミスター・サンシャイン』では、東北方言を使用する人物が悪役として描かれており、強くて悪い印象を強調する効果があると推測される。近年の韓国ドラマでは、方言が積極的に取り入られ、例えば、『無人島のディーバ』(西南方言)、『少年時代』(中部方言)、『砂の上にも花は咲く』(東南方言)、『サムダルリへようこそ』(済州島方言) など、方言をキャラクター性表現の手段として使用する例が増えている。さらに、『ライフ･オン･マーズ』では 1988 年のソウル方言が登場し、『私の夫と結婚して』では東南方言の「ニセ方言」が地域性を表現するために使用される。

次に、異国人の言葉づかいとしては、日本語の開音節の特徴が反映され、話者が日本人であることを強調する手段として用いられている (『ミスター・サンシャイン』)。また、西洋人の場合にはタメ口を使用する傾向がある (『タムナ』)。

さらに、時代劇では、登場人物の地位を示すために하십시오体、하오体、하게体、해라体が使用される。

最後に、娘の彼氏や婿が登場する際には、「義父母ことば」として特定の言葉づかいをする人物が必ず하게体を使用する。

今後の課題としては、メディア韓国語がどのように定着したのか、その原因を社会的・文化的な側面から考察する必要があると考えられる。

【参考文献】

金水敏 (2023)『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』[岩波現代文庫] 岩波書店

趙恵真 (2024)「日韓役割語に関する一考察 - 韓国ドラマ『ミスター・シャンシャイン』の日本語字幕を中心として -」第 12 回国際学術大会及び Symposium 予稿集、韓国日本研究総連合会、pp.23-26.

7. 延辺朝鮮語の 3,4 音節名詞のアクセントの変化に関する研究
―音節量・分節音との関連性を中心に―

東京大学(院)　國　分　翼

延辺朝鮮語は朝鮮語東北方言を基層とした変種であり、アクセントの対立が存在し、その体系が中期朝鮮語に対応していることはよく知られている。しかし最近では、アクセントの合流により古い体系が崩壊しつつある。発表者は昨年の朝鮮学会大会の発表で、【① 1 音節語の L 型は基本的に閉音節語で、末子音が阻害音である語でアクセントが保存されやすい ② 2 音節語の LL 型は末音節が軽音節であるものがほとんどなく、早く他の型に合流が完了した。また、HL 型は「重軽」構造で保存されやすい ③ 2 音節語では、基本的に末子音よりも音節量がアクセントの合流や保存に影響を与えるが、LL 型は末子音が閉鎖音のときに保存されやすい】ことを指摘した。これに加え、新しい世代の話者では音節数が長くなるほど、アクセントの弁別性は弱くなり (福井 2000)、4 音節語ではほぼ語末アクセント型と次末アクセント型に 2 型化していること (Ito 2008) も指摘されている。これらを踏まえて本発表では、延辺朝鮮語の 3、4 音節固有名詞のアクセントの保存及び変化について、音節量や分節音による傾向が 1、2 音節固有名詞よりも顕著にみられるだろうという仮説の下、分析による結果を示す。

朝鮮語諸方言のアクセントと音節量及び分節音の関連性についてはこれまでにも言及されてきた。そのうち、辻野 (2021) は大邱方言のアクセントと音節量及び分節音の関係性について分析しており、3 音節語固有語名詞について、基本的には LHL で現れるが、「開開閉」という音節配列の語は LLH で現れる傾向があり、重音節にアクセントが移動したと考えられると指摘している。延辺朝鮮語の 1、2 音節固有語名詞において音節量、分節音によるアクセントの保存、変化の傾向が見られることに加え、地理的には離れているが延辺朝鮮語と同様にアクセント対立を持つ方言において 3 音節固有語名詞の音節量によるアクセント変化が見られることから、延辺朝鮮語の 3、4 音節固有語名詞のアクセントの保存、変化においても音節量、分節音による傾向が存在するのではないかと考えた。

【参考文献】

辻野裕紀 (2021)『形と形が出合うとき―現代韓国語の形態音韻論的研究』, 九州大学出版会 .

福井玲 (2000)「韓国語諸方言のアクセント体系について」『韓国語アクセント論叢』東京大学大学院人文社会系研究科東洋言語研究室 , pp.1-20.

Ito, C.(2008) “Historical Development and Analogical Change in Yanbian Korean Accent” *Harvard Studies in Korean Linguistics,* Ⅻ , Dept. of Linguistics, Harvard University, pp.165-178.

8. ソウル方言の閉鎖音に対する延辺朝鮮語母語話者の認知様相
― 聴取実験を用いて ―

東京大学(研)　許　　秦

本研究は、聴取実験を用い、中国延辺朝鮮族自治州における朝鮮語母語話者が如何にソウル方言の閉鎖音・破擦音・摩擦音を認識しているのかを明らかにし、ソウル方言と延辺朝鮮語の閉鎖音の体系の違いを聴覚音声学的考察することを目的とする。

延辺朝鮮語とソウル方言の閉鎖音の音価に於ける違いは、多くの先行研究で報告されている。朝鮮語の閉鎖音は喉頭素性による三つの対立（平音・激音・濃音）が存在しており、それらの区別に於いて、VOTの長さが主な音響的な端緒になると言われている。ところが、D. Silva(2006) などによれば、若い世代の話者を中心とするソウル方言の平音と激音の VOT による違いがほぼなくなっており、F0、すなわち閉鎖音に後続する母音のピッチがその区別に有意に働くという。これに対し、延辺朝鮮語は平音と濃音に於ける VOT による違いがほぼなくなっており、H1-H2 がその区別に関わると T. Cho et al(2002)、許秦 (2023) などで報告されている。

このように、ソウル方言と延辺朝鮮語の閉鎖音の音価には違いが存在しており、ソウル方言話者と延辺朝鮮語話者は互いの閉鎖音を聞き間違えることが予想されるが、その具体的な認知様相は未だに明確に報告されていない。

従って、本研究では、まず延辺朝鮮語話者が、如何にソウル方言話者の発音した閉鎖音を認知するのかを聴取実験を用いて観察し、聴覚音声学的側面から延辺朝鮮語とソウル方言の閉鎖音の体系の違いを示すことにする。

その結果、まず、閉鎖音が語頭に置かれる場合、延辺朝鮮語話者はソウル方言の平音を激音として認識されることが多く、激音と濃音は、正確に聴取することができる。次に、閉鎖音が語中に置かれる場合は、全ての閉鎖音を聞き分けることができるが、これは語中に於いて平音が有声音化するのに対し、激音は有声音化しないという違いがはっきりと表れることと関係があると思われる。

1. < 青邱野談 > が再現した神話的想像とその挫折の意味 ―虎・熊・龍との決闘と婚姻の素材を中心に―

韓国・聖公会大学校　洪　ナ　レ

19 世紀初頭に編纂された < 青丘野談 > は、当代まで文献や口碑で伝承されてきた物語を整理して収録し、文学的に昇華された代表的な野談集である。19 世紀の朝鮮社会を反映するかのように、< 青丘野談 > には様々な身分の人物が登場する。特に前近代朝鮮で身分的制約を受けた下層階級の人々が急変する社会の中で逃亡したり、結婚などを通じて成功したり、賢く問題を解決するなどして願いを叶える話が多い。

本研究は < 青丘野談 > に収録されている下流階級出身の李修己、盧貴贊、李義男の物語に注目する。この三篇では、一般的な成功の原因として示される神話的な逆境の克服と結婚によっても決して新しい世界を開くことができず、挫折するしかなかった人物を描いているからである。この三人物は、特異なことに、神話的な英雄談に出てくる上流階級に属する主人公ではないという特徴を持ち、朝鮮の人々が神聖な存在と考えた虎、熊、龍と対決したり、結婚するのだが、彼らは神話的な成功を成し遂げるだけの英雄的な力や勇気を持っていながらも社会に受け入れられず、人間の秩序によって失敗する。

この三作品も他の野談と同様に、既存の物語の掲載や有名作品の素材を借用するなどして新たに構成されたもので、< 青丘野談 > は、神話的かつ英雄的な勇猛さや幸運の持ち主であるにもかかわらず挫折した人物たちを通じて、下位層に許容される逸脱の範囲を定めながら、職域・身分による階級意識や共同体的な感情・倫理に対する保守性を強化する色彩を帯びている。

本研究は、この三編が、従来の野談が示す神話的かつ英雄的な苦しみの克服が成功を保証するという典型的なパターンから脱却し、現実社会の堅固な社会構造が神話的要素に勝るという意識を野談の素材に取り入れたという新たな特徴を考察する一方、現実の中に置かれた悲劇的で孤独な個人にも注目しようとする。19 世紀初頭、下層階級の現実がそのまま反映された野談の出現は、野談が個人・社会の問題を掘り下げた近代文学の問題意識にもつながる出発点となりうるからである。

2. 金東鳴の詩と検閲

天理大学　熊　木　勉

詩人・金東鳴（号は超虚：1900-1968）は朝鮮近代詩の黎明期である1923年、『開闢』誌で登壇、以後、『新生命』『新女性』『学之光』『使命』『朝鮮文壇』『東光』『新生』等の雑誌を通じて活発に詩を発表した 。金東鳴はその後、1950年代に至るまで朝鮮・韓国の詩壇を支えた詩人の一人であった。

彼の詩については、従来、田園・自然志向がその特徴として指摘されてきたが、近年には民族詩としての傾向が指摘される趨勢にある。

本発表の目的は、彼の第一詩集『나의 거문고』で検閲により削除指示がなされた詩「哀歌」（『朝鮮出版警察月報』1930 年 4 月検閲分）、および第二詩集『芭蕉』が 1937 年に出版不許可とされた折に同月報（1937 年 7 月検閲分）に記録された詩「暴風雨」「東方ノ勇士「ガンヂ」ニ送ル」を検討することで、彼の文学における民族主義的傾向について再評価を行うことにある。そのことで、金東鳴の詩の民族詩としての傾向を、検閲という側面から浮き彫りにしてみたい。

発表では以下のことを行う予定である。第一に、『朝鮮出版警察月報』で削除指示の記録が見える「哀歌」（『나의 거문고』検閲）と、「暴風雨」「東方ノ勇士「ガンヂ」ニ送ル」（『芭蕉』は 1937 年に出版不許可：同詩集は修正のうえ 1938 年に出版）の内容を確認し、検閲当局が詩の何を問題としたかについて検討することである。第二に、これに関連して、植民地期の彼の詩をどのように特徴づけることができるかについて再検討することである。植民地期の彼の詩は従来の指摘通り田園・自然志向の傾向が濃厚にある一方で、伝統志向が強くうかがえ、また、一部の詩では宗教性、民族性を強く前面に出している。検閲により詩集に掲載できなかった詩の内容を確認することで、この時期の彼の詩をより明確に把握できるものと思われる。

いうまでもなく、当時の文学者の誰しもが検閲による表現の限界を意識したはずであるが、植民地期に刊行した金東鳴の詩集 2 冊がともに検閲により直接に制限がかかった以上、彼の植民地期の詩の評価は、検閲の影響を念頭に置きながら慎重に考える必要があることであろう。

なお、金東鳴の詩には、解放前に雑誌で発表しつつも詩集に収録しなかった詩が複数存在する。とりわけ「우리말」（『朝光』2-11, 1936）や「글（解放後に「우리글」と改題」（『朝光』3-7, 1937）は検閲を意識して詩集収録を放棄した可能性が高い（解放後、詩集『하늘』に収録）。検閲に伴う表現の限界は、結局は、解放前に書いたとされる詩を多く掲載した解放後の詩集の構成や、解放後まもなく極めて政治色の強い傾向を見せる彼の詩作にも何らかの影響を与えた可能性を考えうるように思われる。金東鳴の詩と検閲の関係について、解放後の詩との関連も含めて考えてみることにしたい。

3. 張赫宙作品に描かれた朝鮮人女性
—1930 ～ 1940 年代の朝鮮語・日本語作品を中心に—

新潟県立大学　高　橋　梓

張赫宙（1905-1997）は、困窮する朝鮮の小作農を描いた小説「餓鬼道」が 1932 年に第 5 回『改造』懸賞小説に入選し、日本文壇での注目を浴びた。その後、張赫宙は 1930 年代から 1940 年代にかけて日本の雑誌に多くの作品を発表したが、時期によって作品の性格が変化していった。そのような変化について、日本のプロレタリア文学系の作家たちは、張赫宙作品が初期の作品から「後退」したと評価した。また、朝鮮文壇では「餓鬼道」以降の作品は朝鮮の現実を「暴露」する特徴を持つと強く批判された。さらに、日中戦争が勃発しアジア・太平洋戦争へと展開していく時期になると、張赫宙は陸軍特別志願兵制度など帝国日本による植民地政策を直接扱った作品を発表するようになる。そのため、張赫宙をめぐっては一般的に「親日作家」と評価され、長い間タブー視されてきた。

しかし、2000 年代以降には張赫宙の作品集が刊行され、張赫宙作品をめぐる研究も少しずつ行われるようになってきた。また、近年では 1930 ～ 1940 年代の張赫宙の日本での活動（プロレタリア文学系の雑誌『文學案内』の編集顧問、新協劇団の「春香伝」の公演活動）と作品を結びつけながら、張赫宙作品をめぐる再評価が進められている。

このような近年の研究をふまえながら、ここで注目したいのは、張赫宙が日本語作品を発表していた時期に朝鮮語でも創作しており、さらにそれらの朝鮮語・日本語作品には多くの朝鮮人女性をめぐる描写を確認できるという点である。張赫宙は朝鮮人女性をテーマにした作品や、女性登場人物を話者・主人公とした作品を朝鮮語と日本語で多く発表してきたが、これまで張赫宙作品における朝鮮人女性の描写が持つ意味についてはほとんど論じられてこなかった。張赫宙の朝鮮語・日本語作品における朝鮮人女性の描かれ方を比較・分析することは、張赫宙がどのような試行錯誤を経て創作を行っていたかについて接近することを可能にし、張赫宙作品をめぐる新たな解釈につながるといえる。

このような問題関心から、本発表では 1930 ～ 1940 年代の張赫宙の朝鮮語・日本語作品における朝鮮人女性をめぐる描かれ方について考察する。まず、1930 年代前半期の日本語作品（「女房」「ガルボウ」「山霊」「十六夜に」「あらそひ」「墓参に行く男」「アン・ヘエラ」「狂女點描」「月姫と僕」「或る時代の女性」等）と朝鮮語作品（「恋風」「谷間の情熱」等）に注目し、1930 年代をとおして張赫宙作品における朝鮮人女性の描かれ方がどのように変化していったかについて明らかにする。さらに、日中戦争勃発後の張赫宙の日本語作品（「痴人浄土」「憂愁人生」「路地」「處女の倫理」等）と朝鮮語作品（「女人肖像」「妻」等）における朝鮮人女性をめぐる描写に注目し、1930 年代の張赫宙作品における朝鮮人女性の描かれ方との差異について考察する。

4. 金南天小説における離脱の倫理

立命館大学（講） 影 本 剛

金南天（1911 ～？）の代表作である「経営」「麦」は転向文学の最高峰として評価されてきた。また、社会主義リアリズム論やバルザック小説についての研究を実際に自身の小説に応用させて『愛の水族館』「浪費」『1945 年 8・15』の登場人物たちが入れ子構造で描きだされた点、『大河』がいかに開化期を対象化したのかという点など、多角度から研究されてきた。本発表はそのような金南天小説の政治的、社会的側面が恋愛を通して描かれている点を、倫理という観点から注目する。恋愛は政治的目的意識のような「意識」の領域よりは感情の領域に属し、政治的判断よりも自己の判断を優先させるさいに恋愛感情が作用している。つまり政治的判断を超越するものとして機能しているのだ。倫理は自己の判断の根拠となる部分であるが、金南天小説における恋愛の機能は、政治的判断によって行動するのではなく、政治的判断を超えて、政治的判断の軸から離脱する運動性が生じる準拠点となるものだ。

本発表は金南天小説の登場人物たちが恋愛的感情を読解することを通して、政治の代弁ではなく政治的言語を乗りこえる主体性を持つ回路を探りたい。そして自分の主体を持つこと、主体化することこそ「転向」の意味であったならば、金南天小説は、一方では「経営」の呉時亨を通して日本帝国主義への転向を描きだしている反面、そのような帝国主義への転向とは異なる主体化の線を女性登場人物たちを通して描きだした点を照明したい。むしろ金南天の転向思想の深化は、日本帝国主義への転向とは逆方向へも伸びている点を提起したい。そして女性登場人物とはいえ、「経営」「麦」の崔武卿と『愛の水族館』『1945 年 8・15』の李慶姫、『大河』のサンネでは主体化のかたちは異なる。つまり自己の行動の根拠となり、社会や政治が求める主体とは別の主体になるための根拠である倫理のあり方が異なるのだ。

金南天小説は社会に規定された存在への転向を描きだす反面（日本帝国主義への転向）、社会に規定された存在から離脱する倫理としての転向も描きだしている。本発表は後者に注目し、それらを腑分け・分節化することを通して金南天小説の転向思想の豊かさを検討したい。

1. 対馬藩から見た明治維新期の書契問題

舞鶴工業高等専門学校　牧　野　雅　司

明治維新期、維新政府の命により対馬藩が行った王政復古通告は、それを知らせる書契の字句が異例であることを理由に朝鮮側が受け取りを拒否し、両国間は停頓状態に陥った（いわゆる書契問題）。本報告では、この時送った書契がいかなるものであったか検討することを目的とする。

従来の研究において、明治維新期の対馬藩は近世以来の朝鮮との関係を既得権益として保持することを目指し、維新政府・外務省に抵抗したとされてきた。しかし、石川寛氏の研究により、明治維新期の対馬藩は朝鮮からの経済的依存状態からの脱却を目指していたことが明らかにされている。対馬藩の行動原理は見直すべき段階にあると言えよう。

報告者はかつて、対馬藩の史料を用いて、将軍に代わり天皇が外交の舞台に立つことにより、日朝関係が暗礁に乗り上げることを対馬藩が予測していたことを明らかにした。それは、書契を作成するにあたって将軍と朝鮮国王とを対等の関係にしていたところに、将軍の上の存在として天皇を設定することを朝鮮側が受け入れる見込みはないという見通しを彼らがもっていたためである。一方で、彼らは維新政府がこの交際の礼式の問題について妥協するという見通しも持っていない。彼らは日朝関係の停頓を予想し、その打開策を見いだせないまま、王政復古通告の書契を作成しているのである。

では、王政復古通告の書契はなぜあのようなかたちで作成されたのか。この問題を検討するために、本報告では次のようなアプローチをとりたい。

それは、近世において作成された書契を整理し、見直すことである。書契の字句に関するトラブルは近世を通じて発生しており、また書契の細かな規則はこの過程で作り出されている。また、書契の作成に関する研究が進められており、既存の史料から新たな情報を引き出すことができる可能性がある。本報告では、近世に作成された書契を見直すことで、王政復古通告の書契を近世以来の文脈のなかで捉え直し、その持つ意味を再検討したい。

2. 植民地期朝鮮における朝鮮人女性医師に関する研究
―東京女子医学専門学校出身者を中心に―

大阪産業大学　崔　誠　姫

近代以前の朝鮮では医学といえば東洋医学であり、医師は皆男性であった。これは儒教的な伝統とも関連しており、看護師的存在として医女が存在してはいたものの、宮廷内での医療活動に限定されていた。

近代の到来は西洋医学をもたらし、韓国・梨花女子大学医学部の前身となる普救女院という女性のための医療機関が設立された。 朝鮮において西洋医学が発達する中で、女性と子どもの健康、出産、育児に対する意識も変化していった。とはいえ、男尊女卑や儒教思想がなかなか抜けない朝鮮では、男性医師の診察を嫌がる女性も多く、女性医師の育成は急務となった。女性医師の誕生は朝鮮女性の衛生観の変化、出産・育児の近代化をもたらした。

1910 年の韓国併合後、朝鮮の医療体制は宗主国・日本の制度の下整えられていく。併合前に設立されていた官立医学校・セブランス医学校を専門学校とし、1920 年代には京城帝大医学部、次いで平壌・大邱などに医学専門学校が設けられた。しかし、これらは男性にのみ入学が認められていた。女子に対しては 1938 年に京城女子医学専門学校が設立されようやく朝鮮での女子医学教育の門戸が開かれたが、それ以前は日本あるいはアメリカなどへの留学が必須であった。

本発表は上記のような歴史的背景に基づき、主に以下の二点について論じる。

第一に、なぜ朝鮮人女性医師が必要になったのか、という点である。植民地朝鮮において近代医療は在朝日本人と一部の朝鮮人にのみ開かれていた。併合前には医療伝道という目的で女性宣教師による医療活動も展開していたが、併合後それらは規制されていく。そのような中、朝鮮社会では朝鮮人女性医師の必要性が高まっていく。医療とジェンダーの関係に加え、植民地と宗主国との関係から、朝鮮における近代医療の普及と女性との関係を検討する。

第二に、東京女子医学専門学校（以下、東京女子医専）で学んだ朝鮮人女性に着目し、医専への進学・在学中･卒業後の動向について検討する。植民地期の医師であり初の女性開業医となった許英粛をはじめ、多くの朝鮮人女性が東京女子医専で学んだ。朝鮮人女子留学生の動向は同窓会誌『女医界』及び各種新聞雑誌などから追うことが可能である。東京女子医専出身者としては朝鮮ではじめて女性開業医となった許英粛が最も有名だが、他にも卒業後京城帝大医学部で研究を続けたり、朝鮮各地の道立病院などの医師になった者たちもいた。『女医界』では卒業した中等教育機関が判明する場合もあるため、入学前～卒業後の動向を可能な限り追っていく。

上記の二点を中心に論じることで、植民地支配と女性医療、朝鮮の近代と女性専門職の関係などについても明らかにする。

3. 京城帝国大学法文学部と高等遊民
―大学設立理念と実態の差にみる「外地」帝国大学の特徴―

武蔵高等学校中学校　通 堂 あ ゆ み

1926 年に設立された京城帝国大学は初代総長服部宇之吉により、その使命として朝鮮・東洋文化研究の権威となることが示されていた。報告者はかつて、大学創設時に法文学部文科系分野では服部の人脈を頼ることでアカデミック・セクタにおいて教育経験をもつ人材を得ることができたのに対し、法科系分野では実務家出身の若手を多く採用することとなり、これが高等文官試験受験・朝鮮総督府官僚を多数輩出するといううごきにつながっていったことを指摘した (「京城帝国大学法文学部の再検討―法科系学科の組織・人事・学生動向を中心に」『史学雑誌』117-2、2008 年)。

法科系との比較では順調に採用人事を進め、必要とする講座設置をすすめていったかに見える文科系ではあるが、講座によっては教員採用の困難があったことや、開設時期の延期や構成変更を余儀なくされていることも確認できる。松田利彦氏による「京城帝大教員が、朝鮮で (あるいはその朝鮮研究において) 何をしてきたかはこれまでしばしば論じられてきた。しかし、彼らの「朝鮮へのコミットメント」のみならず、その裏にある「朝鮮へのノンコミットメント」という心性も今後問われねばならないのではないだろうか」(松田利彦「京城帝国大学の創設」酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房、2014 年、pp.139-140) との問題提起を意識しながら、本報告では法文学部哲学科を中心に、講座配置計画と採用人事過程の細部を復元することで大学当局のねらいと人事実態のずれを明らかにし、報告者の問題関心である、「外地」帝国大学として京城帝国大学が担った役割と課せられた制約や限界について考察することを目指す。

本報告では先行研究でも利用されてきた関係者の回顧録 (多くは大学同窓会編集による『紺碧遙かに』1974 年収録のもの) 等に加え、私家版を含む手記･日記を史料として積極的に利用する。この作業により、従来、文科系人事のキーパーソンとして注目されてきた服部宇之吉に代わって、法文学部事務取扱 (任：1926 年 4 月 1 日～ 1926 年 9 月 11 日) として事実上の初代学部長を務めた安倍能成の果たした役割が明らかとなる。また、法科の若手教員から「錚々たる学者たち」「元老」と評された文科系教員らが、京城帝国大学着任前に教育機関に職を持ちながらも自らを「高等遊民」「浪人」と称していた認識の差も浮かび上がる。

帝国大学文学部出身者にとって 1910 年代末以降の高等教育拡充、なかでも帝国大学に法文学部という複合学部が新設されたこと (1922 年東北帝国大学、1924 年九州帝国大学) は就職の好機となった。このうごきのなかに京城帝国大学法文学部の特徴を見出しつつ、朝鮮・東洋文化研究の拠点たるべく各講座が実際にはどのように準備され運用を始めていったのかを論じる。

4. 植民地期済州島の三姓始祖祭祀財団の社会的位相

一橋大学（院）　金　功　熙

本報告は、日本による植民地支配下朝鮮の済州島に存在した三姓始祖祭祀財団（以下、三姓会）という団体の社会的位相について考察するものである。

済州島には、三乙那（良乙那・高乙那・夫乙那）と呼ばれる三神人が漢拏山北麓の毛興穴（三姓穴）から生まれ、狩猟生活をしていたところ、東方から「碧浪国」の使者と 3 人の女性がやってきて、三乙那は女性たちと婚姻し、それらがもたらした五穀の種子と牛馬を用いて農耕生活がはじまり、耽羅王国に発展したという開闢神話がある。島内には三乙那を始祖とみなす高･梁･夫の三姓が数多く居住し、一部は高麗･朝鮮両王朝期まで長く在地権力者層にあった。三姓では集団で始祖への祭祀がなされ、はじまった時期は定かではないが、遅くとも朝鮮王朝期には行われていた。そして、植民地化直前に「高梁夫三姓会」という団体が組織され、1921 年に「高梁夫三姓始祖祭祀財団」として法人登記された。同団体は、解放後の 1962 年に「高・梁・夫三姓祠財団」に名称を変更し、現在まで存続している。

三姓穴の神話や遺跡は広く知られているにもかかわらず、三姓会に注目した研究はいまだない。そこで、本報告では三姓会が植民地期の済州島地域社会においてどのような位相にあったのかを明らかにするために、当時の地域社会内での三姓祠や三姓会の位置付け・影響力、団体中心構成員らの活動経歴、三姓会の土地所有状況、そして植民地支配機構との関係性について検討する。その内容は以下のようなものである。

三姓祠が大院君政権下の書院撤廃（1871 年）で破壊されたのち、三姓はその再建のために協議や集金などを行うようになり、ついに三姓会を組織した。三姓会は廟の守護や祭祀の執行を団体の目的とし、済州島内に居住する三姓すべてを会員とみなし、会議での決議内容や組織体制から島内の三姓と宗中に裾野を広く持つ存在だったとみられる。同時に、三姓祠は島民一般からも崇拝される対象であり、一部の祭祀は官民を挙げて共同奉行され、そのときの祭官は地域の有力者たちが務めた。また、財団法人化後に役員経験者のなかには社会活動や企業活動に関わっている者も多く含まれ、これらは植民地期における地域有力者層に属する存在であった。加えて、三姓会は大土地所有者でもあり、当時の済州島においてはきわめて大きな耕地を有し、島内における地主―小作関係に少なからぬ影響を与えていたとみられる。

このように社会的・経済的に地域社会への影響力を有していた三姓会に対し、済州島の植民地当局は土地所有の是認や法人許可の周旋、寄付、参拝など、同団体を積極的に支援する姿勢を示していた。しかし、同時に財団は植民地当局の監督・統制を受けていた。これらのことから、植民地当局は三姓会という既存の社会集団を統制・懐柔することで、済州島地域における植民地支配の「安定化」に利用しようとしていたと考えられる。

5. 朝鮮総督府のキリスト教系新宗教に対する政策
―宗教行政により公認されるキリスト教「異端」団体―

桃山学院大学　青　野　正　明

明治以降に「内地」で成立した「宗教的制度」は帝国日本の「外地」へと拡張されて体系化されていった。本発表で用いる宗教的制度とは、近代日本が国民国家を形成していく初期の段階で作られ、序列をもって配置された宗教的な団体の制度を指す。この制度では上から順に、「非宗教」の神社神道、公認宗教団体の教派神道・仏教・キリスト教、非公認宗教団体の新宗教等であった。「内地」で 1939 年に制定された宗教団体法では、公認団体には「宗教団体」、非公認団体には「宗教結社」という用語が用いられている。

植民地朝鮮でも、このような宗教的制度に合わせて神社・宗教関連の法令が整備されていった。その過程で、宗教に関しては、日本の教派神道各教派および仏教各宗派、朝鮮の仏教団体、欧米および日本のキリスト教各教派、そして非公認団体である新宗教等を対象とする法令が制定される。それは布教規則（1915 年）および改正布教規則（1920 年）である。この法令は、「内地」で公認団体を間接的に管理・統制する管長制を継承した布教管理者制の規定を定めている。そして、公認・非公認団体を一括統制する法令であったうえ、「類似宗教」概念をも生み出している。

ところで、３・１運動後に朝鮮総督府は、独立運動を主導した天道教とそれに同伴したキリスト教への懐柔策として、布教を許可する新宗教団体の対象を拡大し、この時期に誕生し始めるキリスト教系新宗教団体にはさらに公認への道を開くという方針転換をした。後者の実施については布教規則第７条第２項の規定が適用されている。次は布教規則の適用により、朝鮮人からなる朝鮮教会の一派独立が認められたことを要約しよう。

総督府当局は、朝鮮教会の「自立」と「自治」の論理を逆手にとり、西洋宣教師と朝鮮教会の関係を瓦解させることによって、総督府に協力する朝鮮教会の育成を図った。それを見据えて、朝鮮教会の中で一教派として西洋宣教師や日本の既成教派から独立する団体が出現する。その結果、布教規則の規定が適用され、キリスト教の教派として宗教行政から公認された朝鮮教会が、1940 年 5 月の時点で 11 団体にも及んだ。

それらの中には、布教活動のために属していた日本組合基督教会から一派独立した朝鮮会衆基督教会や、当時のキリスト教「正統」教派から「異端」とされたイエス教会と聖主教団（神秘主義の団体）も含まれていた。

1920 年代以降の朝鮮でキリスト教神秘主義が生まれ、植民地期を生き延びた社会的・政治的要因として、独立運動後に西洋宣教師が朝鮮人信者のもつ終末思想を教会に取り込むことをしなかった点、および総督府の宗教行政が神秘主義団体をキリスト教の教派として公認してしまった点を指摘できる。そのため、解放後に神秘主義系の団体は勢力を拡大し、深刻な社会問題を引き起こしていくのであった。